みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

震災・原発事故から4年

「福島のこれからをどう伝えていくか」

防護服姿で原発内の取材をする記者

ＦＣＴ福島中央テレビ　報道制作局報道部長
丸　淳也

非日常が日常化した福島

福島中央テレビ本社（郡山市）から3キロほどのところに私の自宅があります。

10年ほど前に建てた家には、狭いながらも庭があります。ガーデニングの趣味はありませんが、せっかくだからと芝を植えました。

水をやり芝刈りをして、少しは見栄えのする庭になりました。そこでは子供たちがよくキャッチボールをしていました。そんな日常がありました。

２０１１年3月11日。この日を境に福島県民の生活は激変しました。衝撃的で劇的な変化です。

私の身の回りでも本当にいろんなことがありました。その一つに先ほど述べた「庭」があります。

我が家の庭に埋められる汚染土

今も約1メートル四方に赤い杭が打たれ、その範囲内は土が20センチほど盛り上がっています。

その「作業」が始まったのは、震災、原発事故の翌年のこと。

少しばかりいかつい風貌の作業員10人ほどが我が家にやってきました。

3日ほどをかけコンクリート部分を高圧水で洗浄し、庭では生えそろった芝を剥ぎ、土を削り取り、庭石を拾い集め、特殊な袋に詰め込んでいきました。最後には庭に大きな穴を掘り、その袋を埋めました。これが「除染」です。

庭のないマンションなどでは、直径1メートルほどのコンクリート筒で囲って地上の片隅に保管してあります。

これは、汚染物質を長期間保管する中間貯蔵施設ができていないために、その前段となる市町村単位の仮置き場が確保できていないからです。だから、自宅で保管することを了解しない限り、除染作業はしてもらえません。放射性物質を自宅で保管する、そんな光景が郡山市や福島市などの都市部でもあたり前の光景になっているのです。

この除染によって、我が家の庭でも空間放射線量は確実に下がりました。

いずれ、中間貯蔵施設が完成すれば、庭が掘り返されて汚染土が運び出されます。

そうなれば、また芝を植えても剥ぎ取られてしまうし、花々を植えても根っこから引き抜かれます。そう考えると、庭を手入れする気にはなりません。

少しばかり自慢だった庭には、今は雑草が生えています。そして、子供たちが汚染土の埋まる庭でキャッチボールをすることもなくなりました。

原発が爆発した…

「復興に向かう上での課題が山積している福島県の現状を伝えてほしい」と、今回の原稿執筆の依頼を受けました。

日々悩みながら迷いながら放送を続けているのは弊社ばかりではありません。依頼を受けたのは、やはり「あの映像」を撮影した局だからでしょう。

震災2日目の2011年3月12日午後3時36分、第一原発から17キロ離れた山中に置かれた福島中央テレビの原発監視カメラが1号機の水素爆発をとらえていました。そのカメラはいわゆるバックアップ用の旧型SDカメラでした。

震災前の2009年には、第一、第二から約2キロの場所に、それぞれHDカメラが設置されていて、非常時に備え常時収録をかけていました。NHKを含めた各社も同様の対応をとっていました。

しかし、震災による停電で弊社も含めたHDカメラはすべてがダウン。弊社の旧型SDカメラだけ電源系統が違っていたために奇跡的に生き残りました。

爆発した福島第一原発1号機

危機的な状況にあった第一原発の様子を生で伝え続けたのです。

原発が爆発するという衝撃的な事実…しかし、ニュースセンターでその瞬間を見たものは一人もいませんでした。

午前中から、津波被災地の映像が次々に入るようになり、原発カメラのモニターを注視していられる者などいなかったからです。

フロアに「煙！」という声が上がった時にはすでに1号機とその北側の5号機の建屋が大きな白煙に包まれていました。

小さな悲鳴が所々で漏れました。デスクや記者たちは県災害対策本部に詰めている福島支社の記者に、そして東京電力などに電話をかけ続けました。

しかし、何も掴めないどころか、何かが起きていることさえ相手は把握していませんでした。

それでも、女性アナウンサーが県内向けに緊急放送(カットイン)を始めました。

「先ほど、福島第一原発1号機から大きな煙が出ました、大きな煙が出ました」。

声がわずかに上ずり、表情が硬い。もちろん原稿はありません。

映像を原発カメラの生中継に切り替えると、煙はもう北に広がっていて薄っすらとしか見えなくなっていました。

カットインから約1分後、その瞬間の映像が間に合いました。建屋がはじけ、真っ白な煙が大きく広がるのがわかります。

その映像に、「この煙が何か、危険なのかどうかわかりません。現在、確認を急いでいます」と、女性アナウンサーが何度も繰り返し、カットインは7分55秒続きました。

私たちは先輩たちから「ウラ(裏付けとなる証拠・根拠)を取れ」と繰り返し叩き込まれてきたにも関わらず、この時だけはウラの取りようもなく、何が起きているのかもわからないまま、映像だけを頼りにひたすら伝え続けました。

カットインは緊急であり非日常ですが、情報もない中で8分近く続けることはありえません。

日常の判断やルール、マニュアルでは対応できない時間に自分たちは居合わせたということに尽きました。

どこを向いて仕事をするのか？

あの日から4年が過ぎました。しかし、今も12万人が県内外での避難生活を余儀なくされています。原発事故による避難対象の市町村では、住民の帰還に向けた模索が続きますが、一度壊れたコミュニティは簡単には元に戻せません。放射線への不安はもとより、働く場所、病院、学校、商業施設はどうするのか…高齢者だけが故郷への帰還を希望し、若い世代は避難先での暮らしを選択する。

介護の担い手が極端に不足し老々介護が深刻になっている地域もあります。

住民の帰還が半数にとどまる川内村

立ち並ぶ仮設住宅

原発事故が、過疎に拍車をかけたことは間違いありません。

その一方で、都市部には避難と復興需要による流入人口が増えています。夜の繁華街もバブル並みに賑わっているとも聞きます。

地価の上昇も顕著で、3月の発表では、上昇率の全国トップ10をいわき市が占めました。異常な事態です。

さらに、東京電力の補償が続くことで、労働意欲の低下を指摘する声もあります。

求人倍率は上昇を続け、建設や介護、医療などの担い手が極端に不足しています。担い手不足が続けば復興は遅れ、ひいては福島県全体の民力は確実に低下します。

挙げればきりのない課題

中間貯蔵施設への試験的な搬入が2月にようやく始まりました。

我が家の汚染土を含め、県内各地の仮置き場から運び入れて保管する施設です。

しかし、施設はまだ一時保管場に過ぎず、双葉町と大熊町の地権者の同意を得て用地が確保される見通しは立っていません。

建設が進む中間貯蔵施設

中間貯蔵施設での保管は最長30年、その後は県外で最終処分されることになっています。福島の人間でさえ信じていないこの法律が30年後に守られているか、私たち、そして次の世代が見届けなければなりません。

もちろん30年後と言わず向き合わなければならない課題は山積しています。

全町避難が続く富岡町

これまでの検査で見つかった子どもの甲状腺がんは、原発事故による放射線の影響とは考えられないとされ、被ばくデータ不足もあって、今後も因果関係を求めるのは困難とされています。

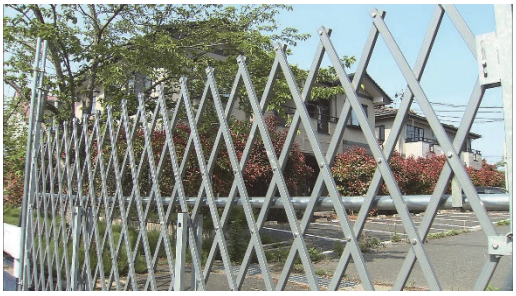
将来、がんはさらに増えるのか、それとも親たちの不安を打ち消す新たな知見が得られるのか。

何より子どもたちの健康は守られているか、絶えず向き合わなければなりません。

30キロ袋で1000万袋のコメの全量検査では、昨年初めて、基準値超えがゼロでした。

福島の農産物や水産物は風評から回復しているのでしょうか。

肝心の福島第一原発の廃炉作業には現在、およそ7千人の作業員が従事しています。その半数が地元福島の作業員だといいます。



立ち入りを規制する富岡町のバリケード

原発の廃炉をはじめ、原発事故がもたらしたいつまで続くと知れない諸々の課題に向き合うべきは誰なのでしょうか。「5年目に入っても、夕方のローカルニュースの半分は大なり小なり、原発事故に関連するニュースですよ」と話すと、相手がメディア関係者であっても、まるで時間の止まった世界の人間と話しているかのように驚かれることがあります。

全国で風化が進もうが、地元のメディアは向き合い発信していかなければなりません。

しかし、この原発事故とは、福島の人間と福島のメディアに委ねてしまってもいいテーマなのでしょうか…

節目と後進の育成

今年は阪神大震災から20年の節目でした。系列の読売テレビでも、様々な番組を通し被災地の20年を伝えていました。ある担当者が話していました。

「今回の番組に携わった現場の記者のほとんどが震災当時は子供だった。そういう世代が、今あの震災を語っている。伝え、語り続けるには次の世代を育てるしか道はない。」

弊社には今年、営業セクションを含め5人の新入社員がやってきました。震災当時は大学生、東京など県外で震災を経験した者がほとんどです。

報道フロアを見渡せば、そういった「新世代」が確実に増えていることに気づきます。

「震災4年、ふくしまで生きる」－2015年3月8日放送から－

ですが、あの震災を報道マンとして経験していないことをマイナスととらえる必要はまったくないと思います。

自分なりの視点をもって県民と触れ合い、感じたことを伝える。これは震災の前も後も変わらない報道マンとしての原則です。

世代を抜きにしても「感じない」人間は「感じない」。「感じない」人間は報道マンにふさわしくありません。

春に報道部長に就いた私が、部会の席で話したこと。

「報道部員とはいっても、しょせんはサラリーマン。机にへばりついている記者も、東奔西走する記者も給料はさほど変わらない。

ただ、今の福島で報道に関わっている意味を考えながら行動してほしい。

高いアンテナを張って時間を見つけては人と会ってほしい」。

節目と言えば、今年は終戦70年でもあります。「周年」とは被災者、被害者にとってはさして意味のないものかもしれません。ただ、何事も恐れるべきは「風化」です。

特に福島は、風評だけがそのまま残り30年、40年という月日が経ってしまうことを一番恐れています。

後輩たちにその意味を伝え続けることが、福島で放送、報道に関わる者の使命と考えています。

東北人は自ら口に出して苦境を訴えたりすることが大の苦手です。辛ければ辛いほど歯を食いしばっ

て耐えます。

最後に放送業界の先輩方へのお願いです。ぜひ福島だけではく被災地に足を運んでください。

実際に被災地の今を見て、全国へと発信してください。

頭の片隅でいいですから、被災地のことを気にかけ続けてください。多くの皆さんにそういう意識をもってもらうことが何より風化を防ぐことにつながると考えています。

[写真提供]福島中央テレビ

2011年3月11日、この日は多くの人々にとって忘れられない日となりました。

〝みんなで語ろう民放史〟では、シリーズで、2012年6月（106号）から東日本大震災地域の放送会社各社に、原稿をお願いしてまいりました。

・大震災とどう向き合ったか（IBC）
・記憶を風化させず 伝えつづける「3・11」（TBC）
・350時間ラジオ生放送（RFC）
・16万人が非難する福島のあの瞬間（FCT）
・震災を伝え続けて2年（JNN三陸臨時支局）
・被災者家族として…テレビマンとして…母を撮り続けた3年間の軌跡（NTV）等

各局の現役のプロデューサー、ディレクターの皆さんから寄稿していただきました。それぞれに「その時、あの時」が綴られています。

ことに震災が発端で大きく変わった生活者の環境、それはその土地に住んでいる人々だけが身をもって体験した大きな試練でした。

復興支援の掛け声は声高に聞こえますが、十分ではないと聞いています。体験、経験を風化させないことがいかに大事かということを強く感じているところです。

〝みんなで語ろう民放史〟は、日本民放クラブのホームページでもご覧いただけます。

1998年11月号〝関東民放くらぶ〟第46号掲載分から3月発行の117号に掲載した分まで。

ご感想を民放クラブまでお寄せください。

（紙）

http://minpou-club.org/index.htm

ホームページ役立っています？

日本民放クラブはホームページを公開して、おおよそ2年が経ちました。

最初は、中国地区岡山のみでしたが、その後、関東、関西、北陸、東海、北海道、大分と続けて公開されています。

今では7地区の活動など何らかの情報が発信され、会員の皆さんへの情報伝達に役立っているものと理解しています。

民放クラブが誕生して今年で30年になります。

一時、会員数が4000人を数えるまでになりましたが、社会的な環境の変化などから新しい会員の参加が下降気味です。

高齢化が進んでいることもあり残念ながら仕方のない現象かと受け止めています。

日本民放クラブのホームページ立ち上げには、全国の仲間の輪を広げること、民放クラブの活動を多くの人たちに知ってもらうことが狙いでした。

2年前の6月に公開して、2015年5月末現在のアクセス数が41500件を超えました。

この数字の評価は分かれるところですが、データの中では多い日で1日のヒット数が90に達した日もありました。

それぞれの地区のホームページを担当する方々は、現役当時の報道デスクを再体験しているようにも思えます。

年4回発行の『民放くらぶ』をフォローする意味でもホームページへの情報提供を望んでいます。

各地区ホームページへのアクセス

・北海道
http://www.kitaminpo.com/
・関　東
http://kantominpoclub.com/
・北陸・石川
http://minpoishi.exblog.jp/
・東　海
http://ameblo.jp/toukai-minpou-club/
・関　西
http://kansai-minpo.com/
・中国・岡山
http://www.geocities.jp/mink_okayama/
・九州・大分
http://www3.coara.or.jp/~oitaminc/